

心脳問題と思弁的实在論
大澤真幸

1 相関主義と心脳問題

- 相関主義（フランスの哲学者カンタン・メイヤスーの造語） 思考と世界は、互いに相関しており、われわれはこの相関の外に出ることはできない。この相関の外にある「物自体」（客観的实在）は認識不能。近代哲学の主流。完成者はカント。
- 相関主義は、自然科学の实在論とは相容れない。のみならずわれわれの常識とも背反する。
- 相関主義を乗り越え、事物それ自体を主題化する権利、思考する人間から独立した事物、相関からはなれた事物の实在の絶対性を、権利として確保しようとする哲学が、思弁的实在論Speculative Realismと呼ばれる立場である。メイヤスーはその主唱者。
- AIの問題としては、これは記号接地問題と関係している。記号接地問題とは、AIは（いかにして）相関主義を乗り越えられるか、という問題。
- SRの相関主義超克は成功しているとは思えない。そこにはまだ限界がある。
- 心脳問題の四つの解決（山本貴光・吉川浩満『脳がわかれば心がわかるか』）。①唯物論、②唯心論、③二元論、④重ね描き。これらはすべて相関主義の枠内にある。
- この報告の目的。心脳問題の再考を媒介にして、相関主義の独自の——SR批判を含む——乗り越えを図ること。

2 脳の相対的（内的）社会性

- 脳はただの比喩を超えて〈社会〉である。〈社会〉とは、複数の独立する主体の集まりからなるシステムで、それら主体の間に、とうていありそうもない秩序が見出される現象。
- カトリーヌ・マラブー（フランスの哲学者）。脳科学の脳のモデルと支配的で社会モデルの間には平行性がある。今日の認知科学の脳のモデルとポストモダンの資本主義の組織原理とは対応関係がある。
- 脳の〈社会性〉を示す経験的事実。
- 盲視
- 幻肢とその治療（ラマチャンドラン）
- カプグラ症候群
- 左脳と右脳
- エイリアン・アーム
- 前頭前野腹内側部VMPFCの損傷。
- イギリスの物理学者ジョン・テイラーの意識モデル。インプット解釈をめぐる競争。神経生理学的な「差延」（デリダ）。痕跡の意味は、未来に属する知覚によって遡及的に構成されている（触覚ラビット錯覚、Visual Backward Masking等）。

- 以上は脳の〈相対的（内的）社会性〉の事例。この延長上に、脳の〈絶対的社会性〉がある。

3 「心の標準的隠喩」批判の批判

- ドイツの哲学者トマス・メッティンガー。 *Being No One: The Self-Model Theory of Subjectivity*, 2004。メッティンガーのモデルは依然として相関主義の内部にあるが、そこには示唆的・啓発的な「誤り」がある。
- メッティンガーによれば、われわれの経験は二つの相で意識を経験する。
- 自分のまわりの現実を表象過程の内容としては経験しない。（現象をそのまま物自体として受け取る）。
- 意識的な「自己Self」についても同じ。
- これら二つの層は、しかし、表象として本質的に異なっている、というのがメッティンガーの着眼点。このことは、三種類の標準的な「心の隠喩」の批判的徹底化によって示される。
- プラトンの洞窟。
- 表象主義的隠喩。心を地図に喩える。
- フライト・シミュレーター
- ここで、「存在とは知覚されていることである」（バークリー）という相関主義の公式が、自己については逆転しているところが重要。現象的な「自己」は知覚されている。しかし、そのことは「自己」の存在の保証になっていない。
- メッティンガーによるデカルト批判。デカルトは I_1 と I_2 を同一視している。

I_1 think therefore I_2 am. \Leftrightarrow I_1 am certain that I_2 exist.

- デカルト批判はよい。しかし、それならば、どうしてわれわれは「私」の存在に関して確信をもつのか。
- メッティンガーの議論の鍵概念。現前するものは、物自体（真の存在）の現象として知覚されている限りで「不透明」。それに対して、「自己」のモデルは「透明」。モデルの向こう側に何かがあるわけではないので。
- メッティンガーの視野に入っていないもうひとつの〈不透明〉がある。たとえば、他者の「顔」や「眼」の〈不透明性〉。これを基軸に哲学を構築したのが、エマニュエル・レヴィナス（フランスの哲学者）。

4 神の存在の「存在論的証明」のように・・・

- メイヤサーのSRIは、いかにして相関主義を乗り越えたか。その論理は、中世の神学者の「神の存在の「存在論的証明」」と同じ論理に従っている。そのことを通じて、現実のラディカルな「偶有性contingency」を存在とみなす。
- 神の存在についての存在論的証明とは、神の概念から神の存在を導き出す論法である。
- しかし、この存在論的証明には有力な批判がある。「存在」は述語ではなく、神の概念の中に「存在」は含まれていない。想像された一万円は存在の一万円とまったく同じ述語をもつが、しかし存在していない（カント）。

- AI研究者は、記号接地問題について考えるとき、しばしば、この「存在論的証明」と同じ誤りを犯している。AIに、「X」についての概念をもたせることと、Xの存在を認識しているということとは同じではない。
- 神の存在論的証明が成り立たないのであれば、SRIによる相関主義批判も成り立たない。

5 相関主義を内側から乗り越える——脳の〈絶対的社会性〉

- リアリティ（何ものかとして諸事物が現象している世界）は、認識する主体と相関的である。ということは、主体（であるところの対象）は、リアリティから身を引いているということ。これはメッティンガーが述べていたことである。
- ここで奇妙なことは、われわれは皆、自分に相関して現れているリアリティが偏っていることを知っている、ということ。どうして。
- 私は、私と同格な——それに対してもリアリティがそれぞれに相関しているという意味で同格な——他者（たち）の存在を直観しており、その意味で、私は、自分の部分性を自覚している。
- ここでメッティンガー批判から導き出した、もうひとつの〈不透明性〉が生きてくる。他者の身体（顔や眼や...）は〈不透明〉で、向こう側に何かある、かのようなイリュージョンを与える。その「向こう側」は、しかし、リアリティの中の積極的な一部ではない。私の（リアリティからの）撤退は他者の撤退の双対性。
- こうして、私に相関する世界（リアリティ）が立ち現れるのだが、それには、ひとつの代償がある。リアリティに穴が空くということだ。他者こそが、その穴である。私に相関して現前しているリアリティが、「すべてではない」。もっと向こうがある、向こうにXがある、ということである。そのXこそ、実在realである。
- われわれの、つまり人間の脳は、他者の存在を——いわば他の脳の存在を——直観することができる。このおかげで、相関主義的な閉域の外に思考は出て行くことができる。他者（他の心的世界）に消極的・否定的に関係する——つまりいつまでも到達できないという形式で関係する——ことではじめて、物自体（相関主義的な閉域の外にある実在）へとアクセス可能になる。他者に対する、このような独特な関係が必然であるということ、それを、（少なくとも人間の）脳の、〈絶対的な社会性〉と呼ぶ。